宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311㈹
定価 一年送料共 1000円

春季大祭斎行

桜花爛漫の神域に流れる雅楽の音

平成元年、神郡宗像の春を告げる恒例の春季大祭は桜前線の到来と時を同じくして、三月三十一日より四月二日迄、厳粛に執り行われた。

この春季大祭は、以前は「保存会」とも称され、日頃公開されることのない当大社所有の神宝・社宝類が期間中、虫干しを兼ねて一般公開されていた。この地方の人々には現在も「保存会」の呼び名で親しまれている。

大祭を迎えるにあたり、三月三十日午前八時から、地元総代並協力会々員多数の手により、諸準備作業が行われた。

三月三十一日、午後五時、先ず総社地主祭、同六時より宵宮祭が斎行され、明日からの大祭が無事盛大に執り行われるよう敬虔な祈りが捧げられ、全神職は参籠に入った。

四月一日、うららかな春の日差しのもと、定刻十一時、正服に威儀を正した養父宮司以下奉仕神職、鎮国寺住職、氏子奉幣使、主基地方風俗舞・浦安舞奉仕者と、地元各界名士並びに多数の氏子崇敬者が大太鼓の合図とともに参進。

献舎にて修祓の後、清々しい気持ちで一同本殿へと参進。

宮司の国家鎮護・皇室安泰を祈念する祝詞奏上に続き、宗像大社氏子会を代表して、桑田次郎氏（福間町）が奉幣詞をうやうやしく奏上された。

引き続いて地元青年団奉仕により、雅びやかな宮中舞楽の手ぶりを伝える、玄海町無形文化財の主基地方風俗舞が、心地良い龍笛の調べに乗せて古式床しく奉納、更に世界平和を祈念された昭和天皇御製の神楽歌に合わせて、扇と鈴で華麗に舞う浦安舞が、玄海中学校女生徒奉仕によりういういしく奉納され、祭典を一層彩った。

祭典終了後、本殿大太鼓奉納の桜井洋氏（東京都）に対し、感謝状並記念品が宮司より手渡され、境内に多数の参列者の拍手が鳴り響いた。

又同時刻、交通安全講社祭が当大社儀式殿に於て厳かに斎行された。

翌四月二日、第一日目と同様、好天の本殿に於て、宮司の大漁祈願・五穀豊穣に併せて献上若布奉告の祝詞が厳かに奉上され、総社二日祭が終了した。

祭典終了後、昭和から平成へと時代が受け継がれる中、厳冬の玄界灘で若布を採取された奉仕者に対し、当大社より感謝状と記念品が一人一人に手渡されると共に、宮司から感謝の言葉が述べられた。

総社祭終了後、新緑鮮やかなる高宮、第二宮、第三宮、宗像護国神社と、それぞれの祭典が奉仕された。

宗像護国神社では、宗像市郡の遺族百数十名、伊豆県会議員、市町村長や同議会議員、当大社総代等多数参列のもと、護国の英霊を慰め、遺族・市郡民の幸福と弥栄とが祈念された。

午後二時には、献茶祭が行われ亜素から熱心に茶道を学んだ当社巫女が、南坊流の袱紗のさばきもさわやかに御点前を披露した。

尚、神賑行事として、四月二日早朝より本殿横境内に於て、奉納剣道大会が開催され、見事に咲き誇る桜花の中、少年剣士等が日頃修練した技を競い合い、烈昂の掛け声が終日神域にこだました。

かくして三日間に亘る春季大祭は、連日の温暖な天候に恵まれ、春休み最後の土・日曜日に重なったこともあり、家族連れ、若者等多数の参拝者により境内は賑わいを見せ、神人和楽の伝統のもと盛大裡に幕を閉じた。

平成元年献上若布
採取者感謝状表彰者名

古賀　政治（大島漁協）
原　芳雄（〃）
石橋　務（鐘崎漁協）
広橋　利信（〃）
田畑　勝利（福間漁協）
渡邊　清（〃）
川西安太郎（神湊漁協）
天野　忠幸（〃）
村田　照雄（地島漁協）
安部　暁昇（〃）
鐘川　五郎（津屋崎漁協）
西住　芳国（〃）

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡(092)三六五一－九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒600）
本店 電話 京都(075)三四一－三三四(代)～四番
三四三－三三四一番

先帝陛下が神去りまして二カ月余り、無事御大喪の儀を終えて昭和の御代を思うこと一層切なるものがある。ところがこの間、国民大多数の悲しみを余所に、無遠慮無責任な戦争責任論や政教分離を振りかざしてジャーナリズムが騒ぎ立て、多数国民の心を不当に暗く重いものにさせ、或は深く傷つけた事実は、これが戦後日本の姿、敗戦の避けがたい所産とはいえ、今更ながら信教の自由、言論の自由とはそもそも如何なるものなのかを、深刻に考えさせられたことである。

○

さて、世間に論議の渦をまき起したいわゆる反体制論者たちの主張、その論点は多岐にわたり、所詮本欄で反批判の委曲を尽すことも不可能ながら、彼らの主張が持つ問題点だけは紙数の許す限り指摘しておきたい。

まづ根本は、現政府が純粋に政治的な問題での混乱と不手際にうろたえ、その余波が及ぼす影響を恐れてか、このたびの祭儀に自から政教分離論を持ち込み、殯宮儀礼と国事大喪とを二分した事に無用の混乱が発端した。そもそも現憲法は、天皇が国家国民統合の象徴であられる事を規定している。換言すれば、天皇の御存在は正しく国民そのものの存在と等質であられるのである。その天皇が、国民一人一人の信教に関する自由を犯されたというのであれば、問題は異なった次元で論議されなければならないが、天皇の祭儀に関する問題を、国民一人一人の信教自由論と同じ「私」の位相を持ち込んで論ずるのは、明かに次元の混同だと言ってよい筈である。

もちろん国家の理念には諸種の在りようが考えられるが、我々は国家即ち国民のために天神地祇を祭祀される御存在として天皇であられるお方を統合の象徴と仰ぎ、戦後の国家再建を計って来たのではなかったか。この事実を無視して、天皇の御存在を単なる政治上の粉飾でもあるかのような論をなすのは、それこそ憲法違反の疑いありと言ってよい。

国家の原点に返れ

戦後は無宗教というよりむしろ反宗教の立場が、教育の世界においてさえ信教自由の名の下に過剰な保護を受けて来たように思われる。その結果、公的な葬儀は無宗教形式が正しいのだとする欺瞞さえ罷り通っている。御霊の存在を認めぬ慰霊や御霊への感謝儀礼を主張する者たちの正体は、今回の御大喪中天皇家の私祭には出席しないと称して、控え室にいた人々の礼儀をさえ弁えぬ態度によって示されていた。国民はこの事実を忘れてはならない。

○

第一の大きな論点は、慎みを忘れた一部論者・新聞投稿家の戦争責任論である。先の陛下を敬仰し国を愛する国民にとっては、口にすることさえおぞましい事柄だが、先の戦争を終えて半世紀にも近い年月を経た今日、しかも崩御の悲しみに沈む大多数の国民に向って、対戦国であった故に捨て切れぬ怨念を持つ一部外国人からのそれはまだしも、我が同胞の口からこの事の聞かれたのは耐え難かった。それは丁度敗戦直後、国家の為に貴い生命を捧げ、或は国内での空襲に生命を奪われた同胞に対して、臆面もなく大死呼ばわりをし、生き残りえた幸せと責任とをただ自己の利益という視点からしか見得ない同胞に接した時の想いに似ている。これがどれほど死者を冒瀆し己れを卑しめる行動であることか、それをさえ知らぬ日本人がいるということなのである。国自身が喪に服することを宣してくれたパキスタンや印度・バングラデシュ、そして恩讐を超えて哀悼の意を表明してくれた台湾政府、大喪に参加してくれた百六十四カ国の国家代表に対しても、彼らの言動は礼を失していると言ってよいだろう。

最後にこの度の殯宮儀礼は、再び天皇を神格化し、その権威を政治に利用しようとする保守政治家の企みによるとする世俗的憶測についても、一言しておかなければならない。「かみ」という概念の誤用については、今回の外人特派員たちによる報道にも、残念ながらなお顕著に見出された傾向である。我々はまずこの偏見打破に一層の努力をしなければならない。また政治の争いは政治のルールに則って為すのが正当。天皇の権威が政治に利用される可能性を理由に、天皇からの権威払拭を説くのは、政治的欺瞞以外の何ものでもない。天皇の御存在は、政権の抗争を超えた権威であられるからこそ、国家統合の象徴として今日なお厳存されるのである。

（神社新報より）

余滴

桜花爛漫、穏やかな春光の下、春季大祭に併せて、高宮祭が斎行された。高宮祭は、神殿も、拝殿もない露天の斎場で古代祭祀そのままの姿で行われる。この季節は、よく春雨に見舞われるので、御本殿より遙拝する事が多い。

伊勢神宮の式年の造替も間近に迫り、募財活動も活発に行われている。二十年毎の建替えで、今度は、第六十一回を数える。千数百年の永い歴史の間、古代そのままの姿で今日まで伝承されているが、ここ神宮には、祭典用の拝殿は設けられていない。御垣内の左側に石囲い拝座があり、大宮司以下禰宜は、この砂利の上に着座して祭りを行うのである。雨天の時には、止むを得ず右側の四丈殿に移る事になる。これも時代の推移によるものであろう。本来神社の祭典は、式日にとらわれずに天気のよい日を選んで行っていたかもしれない。戦前、郡内各神社では夏から秋にかけて祭りには必ず宮相撲が行われた。割と云って、全素人力士が、東西に分れ本番の取組みがあり、最後の大関の出番になると、烏帽子、装束姿の行司が、「晴天一日取進みます」したる所、口上に始まり、「この一番をもちまして千秋楽に御座りまする」に終った。

スポーツには、「アウトドア」「インドア」の規定があった。社会環境の変化で、近年この区別が無くなっている。東京ドームの野球も結構であるが、大自然のまぶしい太陽の下での真のスポーツのあり方も改めて考えてみたい。

第三三三回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎選　毎月末日〆切

大島　屋形トミヱ
夕茜今さしわたり帰り来し漁船に二つ黒き人影
（評）夕茜の逆光に立ち、一日の労働を終えて帰り来る漁船の二人。そこに作者は詩情を見出して鮮明。

東郷　藤崎　辰子
薄黒く立ち揃ひたる木蓮の固き蕾が銃弾に見ゆ
（評）五句の飛躍した表現が一首を引きたたせた。固きから、銃弾へと続く呼吸に並々ならぬものを感じる。

八幡東　江口　妙子
わが畑に沢山採れし大根を本を片手に桶に漬け込む
（評）二句の口語に巧まない清浄さが密んでいる。四五句を倒置して少し流れを変えて見たい気もする。

田熊　鷲頭かつ代
わが店の酒の値も知らで在り経るを幸とはおもへ何やらさみし

田久立花　勇雄
あと幾たび八十路のわれに叶うかと種子いも選りて床土に挿す

吉留　白木うめの
噛む如く山の赭土削りゐしショベルカー暮れて運ばれゆきぬ

深田　中野　節子
余生豊かに旅は出来ねど爬虫類の革のバッグを求め得し我

自由ヶ丘　後藤　君代
十年の歳月思ふわが町の駅への道に家ならび建つ

小倉北　槇原　静子
山茶花の葉裏かへして吹く風の音を聞きゐる夕ぐれの部屋

武丸　中村さつき
暖冬に続く三月暖かし辛夷咲く道とぼとぼ歩く

鐘崎　安永　久子
水割りの一杯毎にカラオケの嫁の艶増す声を楽しむ

小倉北　松木　政子
庭隅に真紅の花を落しつつ今朝も新たな山椿咲く

福間　広渡一寿軒
玄関に置く翌檜の緑淡く伸びゆく葉尖きの花の可憐さ

原町　八波　五月
おん崩御知りて夜明けの庭に立ち朱の藪椿落つる音きく

八幡西　川崎　ウラ
暖かき庭に出づれば石露の穂は吹かれつゝ寄りどころなく散る

大島　目原　節子
放たれし扉の中に現なき老人まろびぬ病室訪へば

田熊　力丸　一郎
年明けを湯治の宿に過しをり湯ぶねにそそぐ木洩日やさし

池田　小田　イセ
主婦として家事に追はれるし日も杳くはや人生の涯に来たるか

徳重　石松や寿子
卒業の記念に描きし雛の軸掛けて七十の春を迎へぬ

名古屋　野崎　博三
苔清水岩を伝ひて雫く音に春の声聞く三輪の神山

滋賀　岩瀬　辰夫
北帰行中休みする雁の群去れば琵琶湖の冬も終りぬ

宮田　片山　朔子
老松を吹き抜ける風の冷たきに六甲おろしというを知りたり

武丸　立石ろせ乃
老に入りわが得しものは何もなしただ遺る瀬無き日々の明け暮れ

池田　小田しめの
夜更けまで灯し部屋も静もりぬ心をこめて聽を書く

吉留　高山　信子
頑固なるわが咳さえも森羅万象春のめぐみにいやされて行く

奉納剣道大会

豆剣士から大人まで四百名が参加

去る四月二日、午前九時より恒例の春季大祭奉納剣道大会が開催された。

この大会は、福岡県剣道連盟宗像支部の主催により毎年春季大祭神賑行事として本殿横境内で野試合で行われている。

今年も宗像地区を中心に約四百名が参加、男子の部は小学生より一般までの四段階に分かれ団体戦で行われた。

大会の初めに、参加者一同はお祓いを受け、花田支部長に合わせて本殿に拝礼を行った。続いて花田支部長、当社養父宮司の挨拶、天野審判部長の諸注意があり、剣道型の模範演技の後男女共各部で熱戦を展開した。

春の陽光のもと、神苑に日頃鍛えた腕を披露し、白熱した試合を繰り広げた平成元年の奉納剣道大会も、午後二時すぎには終了し、引続き表彰式が行われた。高成績は次の通り

◇男子の部

小学校一・二年の部
優　勝　玄海少年剣道
準優勝　東郷剣道教室
第三位　赤間西剣道教室

小学校三・四年の部
優　勝　玄海少年剣道
準優勝　赤間西剣道教室
第三位　東郷剣道教室

小学校五・六年の部
優　勝　玄海少年剣道
準優勝　日の里東剣道教室
第三位　自由ヶ丘剣道教室

中学校一年の部
優　勝　玄海中学校
準優勝　中央中学校
第三位　日の里東剣道教室

中学校二年の部
優　勝　日の里中学校A
準優勝　日の里中学校B
第三位　玄海中学校A

高校・大学の部
優　勝　東海第五高C
準優勝　福岡中央高
第三位　福岡教育大A

一般の部
優　勝　河東剣道教室
準優勝　東部剣道教室

◇女子の部

小学校の部
優　勝　日の里東剣道教室A
準優勝　赤間西剣道教室A

中学校の部
優　勝　河東中学校
準優勝　中央中学校
第三位　玄海中学校

高校・大学の部
優　勝　東海第五高
準優勝　宗像高A
第三位　宗像高B

一般の部
優　勝　東部剣道教室
準優勝　河東・赤間西混合チーム　以上

新出光宗像神社

稲荷神社遷座祭斎行

新出光石油株式会社（福岡市博多区呉服町）奉斎の宗像神社、稲荷神社の新社殿竣功による遷座・奉祝祭が去る三月二十八・九日の両日、当大社より禰宜宗像清文以下四名の神職が奉仕して厳そかに斎行された。

祭典は二十八日午後七時の遷座祭に先立、午後三時新社殿洗清の儀並新殿祭を行い、定刻午後七時、本社五階の両神社旧殿に於て出御祭を同社代表取締役社長出光豊氏外関係者多数参列の下厳粛に斎行。祭典終了後〝滅灯〟の一声により、七階建同社ビルの照明が総べて消灯した浄闇の中を古式に則り、宗像神社・稲荷神社の御神体を捧持する神職を中心に〝オー・／〜〟の警蹕と雅楽の音色の流れる中、行列は粛々と五階より屋上の新社殿へ参進、御神体は無事、社殿の御神座に奉遷された。

引続き、新社殿に於て鎮座祭を斎行、斎主宗像禰宜が両神前に鎮座奉告の祝詞を奏上、玉串拝礼を行い続いて出光豊社長が参列者を代表して両殿へ玉串拝礼を行って、遷座の儀の祭典は厳粛裡に終了した。

翌二十九日、新社殿の銅板葺屋根が陽春の光に照り映る絶好の祭日和に恵まれる中、午前十時、宗像神社・稲荷神社の神前に於て、遷座功奉祝祭が厳粛盛大に斎行された。祭典は修祓の儀の後両神社への献饌、斎主祝詞奉上、玉串拝礼に続き、雅楽の調べの中宗像大社養父守宮司、新出光石油㈱代表取締役会長田尻一雄・若杉健太郎両氏、同社長出光豊氏、同副社長河根裕氏が社員代表として順次玉串拝礼、続いて施工業者の安井建築設計事務所、大成建設㈱、㈱弘江組各代表の玉串拝礼、撤饌を行って滞りなく祭典を終了。引き続き六階の直会々場に於て出光社長より施工業者へ感謝状の贈呈並に挨拶の後、当大社養父宮司の乾盃の発声で直会が催された。

此の度の新社殿建立は、同社が去る昭和四十九年四月現在地に七階建のビルを建設して本社を移転し、五階会議室に「会社事業運営の中心となる会議を神前で誓うと共に、神明の加護により社運隆昌と社員一同の健康を祈念する」との趣旨に基き守護神として宗像神社並に稲荷神社を奉斎してより今日迄、御神徳の加護と全社員一丸の赤心により社業も年々繁栄して来たので、守護神の両神社を会社の象徴である本社ビル最上階に建立し、更なる発展を祈念して、約三千坪の境内地（八工芝）を設け、高さ一m巾二m四方の石組基台上に総ケヤキ木、銅板葺、流造として、博多湾より吹く玄界灘の強風にも充分耐えられるよう設計された、実に見事な堅牢流麗な社殿二殿が建立されたのである。

辞　令

平成元年四月一日付で若干の異動が発令されましたのでお知らせ致します。

尚、該当者以外は従前の通りです。

◇海洋分局
事務局長　権禰宜　堤　宏

◇庶務部
庶務課員（新採用）
嘱　託　宇都宮　勤

◇経理部
用度課長
権禰宜　石橋　清寿

◇祭儀部
儀式課員（新採用）
出　仕　葦津　幹之　以上

〔祭典案内〕

沖津宮現地大祭

来る五月三十七日、筑前沖ノ島鎮座宗像大社沖津宮において日本海海戦を記念し、恒例の国家鎮護現地大祭を斎行致しますので、参拝希望の方は御連絡下さい。

記

一、参拝日程

1五月二十六日　金曜日
午後六時までに中津宮（筑前大島）に到着し届け出る事。受付後宵宮祭に参列する事。

2五月二十七日　土曜日
午前六時大島出発。午前九時沖ノ島到着、直ちに海水にて禊、午前十時祭典。午後一時沖ノ島出発。同四時大島到着、解散。

3渡海船（大島〜神湊間）
大島発午後四時二十分、同六時。

4当日荒天等のため渡島不可能の場合は、大島の沖津宮遙拝所に於て祭典斎行致します。

一、要　項

1参拝者は沖津宮奉賛会費として一名八千円をお納め願います。

2五月二十六日は大島にて斎泊、宿泊所、食事（弁当）は各自で御手配下さい。

3乗船者数により制限がありますので、参拝希望の方々の内より当社で厳選の上決定致します。

4年令七十才以上の方の渡島は関係筋の通達によりお断り致します。

尚、長時間の乗船に堪えられない方や健康状態が良好でない方は、御遠慮願います。

参拝申込書、心得、要項等を用意しておりますので、住所・氏名・年齢を記入の上左記宛御申込み下さい。

一、申込先
〒八一一―三五　宗像郡玄海町田島
宗像大社社務所　儀式課
電話　〇九四〇―六二―一三一一㈹

〝特別展のおしらせ〟

題　名　海を守った男達
期　間　四月二十日〜六月三十日
場　所　宗像大社神宝館一階

我が国の近代国家の夜明は「文明開花」の呼び声から始まる。日本は永い間の鎖国で窓を閉じていたが、各国の相続く来訪に門を開けると目に入る全てが、新しくも珍しく驚きの連続であった。ようやく世界のレベルへと迫り、列国の仲間入りも近づいた明治時代の後半に、「日露戦争」が勃発したのである。

当時の極東は列国の権益争いで騒然としていた。これに対し日本は連合艦隊を配備し海の守についた。こうして艦船を操る男達が防波堤となり、海域を防禦したのである。

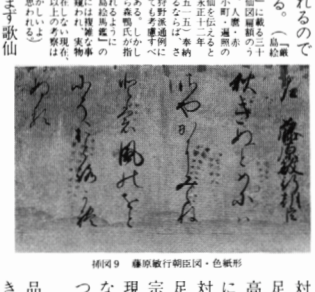
三十六歌仙扁額（七）

宗像大社の「州信」印三十六歌仙図扁額

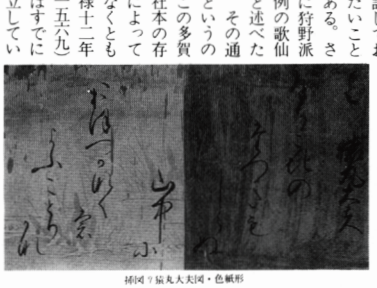
黒田泰三

比較にあたっては、豊国神社本、高台寺本はともに画面のいたみがひどく、とくに高台寺本は現在十六面しか残らないことを考慮に入れ、宗像大社本も加えた四作例の中で共通して保存状態の良い歌仙、藤原興風を選ぶことにする。

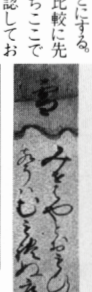
比較に先立ちここで確認しておきたいことがある。さきに狩野派通例の歌仙絵と述べたが、その通例というのはこの多賀大社本の存在によって少なくとも永禄十二年（一五六九）にはすでに成立していたことが知られるのである。（島絵六歌仙図扁額のうち、人麿・赤人・小町・遍照の四歌仙を伝えるとおり永正十一年（一五一四）奉納とするならば、すでに狩野派通例の歌仙絵の存在は明らかである。）



補図9　藤原敏行朝臣図・色紙形



補図7 猿丸大夫図・色紙形



補図10　短冊　聚瀑院道澄筆

補図8　短冊　聚瀑院道澄筆

まず歌仙の姿態をみていく。宗像大社本はどっしりとした姿態をとり安定性が感じられる。多賀大社本もそれに近く安定性はあるが宗像大社本ほど落ち着いた雰囲気はない。豊国神社本は歌仙の姿態にも動勢を出そうとするが、そのため姿態に少し不安定な感じがある。高台寺本は姿態の安定性を強調しすぎて、やや不自然な感じがする。つまり宗像大社本は歌仙の姿態を三角形としてみると、最も鈍角な二等辺三角形であり、それが安定性をもたらしている。つぎに顔、手、足の比例についてみると、多賀大社本は顔が手、足にくらべて大きく、豊国神社本は顔が手、足が小さい。宗像大社本の現実的で自然な感じが目立つ。

これらの作品の実際の大きさの違いを考慮にいれつつ細部の比較を行なってみる。（多賀大社本は縦三五・二、横二五・七糎、豊国神社本は縦三五・〇、横二四・八糎、高台寺本は縦三七・〇、横二一・〇糎である。）

衣文線について、宗像大社本はあたりのあるすっきりとした描線で、歌仙の肉体の存在を象徴する曲線にリズム感があり優れている。多賀大社本は、太く力強いがややリズム感に欠ける。宗秀筆の豊国神社本は速筆で大胆な感じが強く宗像大社本にくらべて荒い。それは『本朝画印』宗秀の項に言うように「筆法もっぱら永徳に似て荒し」を裏付けるかのようである。伝光信筆の高台寺本は打ちこみや描線の抑揚は宗像大社本に近似するが、宗像大社本の明快さには欠ける。つまり宗像大社本は描線に抑揚があり、微妙な屈曲のリズムがあり、デッサン力にも優れていること、個個の描線としてでなくモチーフをつくる描線の集合としてみた場合、集約力にすぐれ、いずれの作例よりも洗練されている。眼、口、鼻など歌仙絵にとってはもっとも重要な顔の要素の表現をみても、宗像大社本は抑揚のきいた描線を慎重に重ね、しっかりとした形態感をつくりえている。

三作例の中でもっとも古い多賀大社本の顔に施された隈取りの手法に注目すると、多賀大社本のきわめて特徴的で明快な手法は、京都大徳寺の狩野永徳の父、狩野松栄筆涅槃図を想起させる。年代的に考えても多賀大社本は狩野松栄あるいはその周辺の作とみなしうる可能性が高い。しかもそれは時代的な特徴というより画家の特徴のようである。また、描線が慎重で、洗練さに少し欠けるうらみがある。

宗像市の官庁街

大きく変った東郷地区中心部

昨年十月末に完成した県宗像総合庁舎は、敷地約九千平方㍍、鉄骨鉄筋三階建てで、延べ床面積約三千平方㍍の本館に付属施設として車庫、試実験室、水防倉庫等四棟がある。一・二階は宗像保健所、三階は宗像土木事務所となっており、一階の一部には福岡教育事務所宗像児童生徒相談室がある。又二階ロビーには大社秋季大祭の海上神幸「みあれ祭」をあしらった縦六㍍、横四㍍のレリーフが設けてある。以前は各々昭和二十年代の木造建ての上、東郷・田熊に点在していたが、今回統合され関係者、住民も便利になった。総工費約十二億円。

本年三月初旬に完成した交通安全協会々館は、敷地約三百六十平方㍍、鉄骨二階建てで、延べ床面積二百八十五平方㍍。一階には事務室、応接室、小会議室、検査室があり、二階は七十人収容の大会議室と倉庫になっている。又本館横には免許証用の顔写真自動撮影ボックスも設置されている。同協会は、以前は宗像警察署内に間借りしていたが、今回の会館完成に伴い、交通安全の啓蒙運動にも一層の努力を図り、安全運転講習会や地区交通安全管理者会議等、各種の会議や催しに広く活用することにしている。建設費約四千万円。

一方県宗像総合庁舎内への保健所移転により、旧保健所が解体され、跡地に県道鳴渕～宗像線のうちの未開通部分二百三十五㍍が開通、県道宗像～玄海線に接続した。この道路は国道三号線から東郷地区へ入る幹線で、旧三号線とも交差しており、市街地を抜ける南北の道路開通は交通ラッシュの緩和につながっている。

宗像市の宗像警察署に隣接して県宗像総合庁舎が、又同署前には宗像交通安全協会々館が完成、宗像市役所も同所に在り、周辺は宗像市の官庁街となると共に、県道鳴渕～宗像線も開通、街の様子が大きく変った。

玄海まちおこし討論会

熱気のこもったディスカッション

「株式会社玄海町を考える」をテーマに三月十八日(土)、鐘崎漁村センターでまちおこし討論会（まちづくり研究会主催）が開催されました。

これは、農業、漁業、商工業など各産業の代表者が集まって討論し、まちづくりの方策を見出そうと行われたものです。

当日は、宇佐市商工会長の溝口栄治氏が具体的な事例を上げて、宇佐市のまちおこしについて講演。玄海町のまちおこしについてもヒントを投げかけていました。

次いで討論会では、まず、代表者がパネラーとして各産業の現状と課題を説明。農業については、これからはいかに消費者のニーズにあった作物を作るかが重要であると代表の井上新一氏（宗像農協副組合長）。漁業については、減少する資源対策としての漁業構造の変換や漁協の合併問題などを代表として宗岡伊三氏（鐘崎漁協組合長）が。また、商工業問題は都市部のスーパーなどに流出する町内消費者対策をと代表の石橋武氏（玄海町商工会会長）。観光については、新規の観光事業や現有の観光資源の開発など、観光客増加の方策を小林賢二氏（玄海町観光協会会長）が説明。さらには、サラリーマン代表の中野正幸氏（新日鉄玄海会会長）が、町全般に対する意見を述べました。

まちづくりについては、これからみんなが考えていかなければならない重要な問題です。今回の討論会を機にまちづくり論争があちこちで盛り上がってくれればと期待しています。

（中野晴海記）

アンズの花を咲かせて

幼稚園児と分校生の交流

宗像郡玄海町の玄海幼稚園（七田安男園長・七十人）に、徳島県の小学生よりアンズの苗木が届き、園児が毎日交代で水をやり、「早く大きくなって、きれいな花を咲かせて」と大事に育てている。

この苗木は、本年二月末徳島県三好郡山城町の大野小学校分校佐連分校一年生の下窪弘子ちゃんから届いたものである。

この交流のきっかけは、昨年末宗像地区消防本部が地区内の保育園児を対象に実施した「飛べ飛べ火の用心」で、玄海幼稚園の園児が飛ばした風船を弘子ちゃんが拾ったことから始まった。

園児達は風船に「お友達になって下さい」「お手紙を下さい」等、小さな願いを託してメッセージを付けており、ただ一人の分校生弘子ちゃんから、早速「お友達になりましょう」と返事が届いた。弘子ちゃんから届いた手紙に喜んだ園児達は、独りぼっちの弘子ちゃんに何かプレゼントをしようと、同園で飼育していたイシガメ十二匹の内二匹を、一月末弘子ちゃんへプレゼントした。

思いがけないカメの贈り物に弘子ちゃんは大喜び、担任の先生と相談して、山城町の町花アンズの苗木三本が「村おこしでアンズの里づくりをしています。かわいい花を咲かせて下さい」との手紙を添えて送られて来た。又お母さんからも特産の〝ハッサク〟一箱が送られて来た。

苗木が届いた同園では、早速西側広場に植え、双方の交流のシンボルとして大事に育てると共に、今年の夏休みには弘子ちゃんを招待しようとの計画もたてており、この交流が更に深まることを願っている。

このように宗像市東郷地区の中心街は大きく様変りし、宗像市の都市整備計画も着々と進行している。

社務日誌抄

三月一日　月次祭
福岡財務支局長中島勝巳氏・宗像市助役外二名参拝
三月二日　宗像大社責任役員会議
出光興産㈱徳山製油所副所長内山實氏・出光エンジニアリング㈱徳山事業所長井ノ口順一氏・出光徳山建設保全協力会長山本博靖氏・同海上輸送協力会長森淳氏・同陸上輸送協力会長藤井英雄氏外十五名参拝
出光興産㈱名古屋支店長脇谷剛氏・出光名古屋光運会十二社参拝
三月三日　航空自衛隊芦屋基地司令空将捕月輪時祺氏来社
三月四日　香川県浪打八幡神社氏子参拝団二十三名参拝
三月七日　宗像大社氏子会役員会議
宗像市竹原利行氏筑紫蓬刀一振奉納
三月九日　若布献上奉告祭
三月十日　若布献上
福岡海上保安庁燈台課荒川業務係長転任挨拶の為来社
三月十一日　出光興産㈱東京支店副支店長稲用和雄氏・同立川支店長松本誠之氏・東京出光会二十社参拝
武田運輸船舶安全推進会・武田石油㈱代表武田弘氏外二十一名参拝
宗像大社菊花会三役会
三月十二日　国学院大学院友会高藤氏参拝
三月十三日　JR西日本博多車輌所竹原氏外八名参拝
三月十四日　宗像市西川芳泉氏日本画二点奉納
三月十五日　月次祭
石川県立博物館長外一名来社
職員会議
三月十七日　西独フラク・ハールブッシュ氏来社
出光興産㈱東京支店副支店長竹内稔氏・東京光運会長横沢正晃氏外十八名参拝
三月十八日　九州産業大学教授佐藤正彦氏来社
㈶京都市埋蔵文化財研究所田辺昭三氏来社
三月十九日　松尾神社祭・北筑社氏組合員参列
出光興産㈱鹿児島支店一行十七名参拝
三月二十一日　皇霊殿遙拝式
海上保安庁水路部沿岸調査課主任沿岸調査官山本正人氏来社
三月二十二日　玄海町消防団第一分団歴代分団長会議
三月二十三日　山口県八幡人丸神社宮司高山宣知氏来社
田島地区遺族会総会
三月二十四日　宗像大社氏子会評議員会
ヤマト運輸㈱六十名参拝
在郷軍人会一四五名参拝
三月二十五日　RKBテレビ神宝狛犬取材
三月二十六日　宗像郡遺族会遺児会五名参拝
三月二十七日　宗像大社奉納盆栽役員会
福岡教育大学事務局長占部道敏氏転任挨拶の為来社
三月二十八日　新出光石油㈱宗像神社遷座祭・宗像繭官外四名出向奉仕
三月二十九日　新出光石油会・武田石油㈱代表武田弘氏外二十名参拝
㈱宗像神社遷座奉祝祭奉仕者前記神職
三月三十日　宗像警察署交通課長江頭昭氏・同外勤課鐘崎駐在所服部正文氏着任挨拶の為来社
地元総代並協力会春季大祭諸準備奉仕
三月三十一日　春季大祭総社地主祭・宵宮祭

RKB分化セミナー
日本のこころを尋ねて むなかたの海辺と杜に（五）

渡部昇一

その国体が変るような感じがする時、その時、当時の人は天地が崩れるような感じがしたと思うんですね。例えば天皇が仏教を信することに決めた時、神代以来の公家の中臣・大伴両氏はしまいだと嘆いた訳です。ですね、どうして天皇は「外国の神を信じ給うのか」と言って嘆きつつ滅んで行っている訳ですよ。そういう人がいる訳です。その人達にとっては天皇は、国体は変るので超重大事で、嘆きつつ戦って負けて行く訳です。しかし後で考えてみれば、神道だけの日本というのは非常に純粋かもしれないけれど、ちょっと純粋過ぎて寂しいんじゃないかと思うんですね。まあ仏教があったから聖徳太子も出た訳ですし、大仏もあるし、法隆寺もあるしなかなか賑やかになりました。後からそうとそう悪いことでもなかった。だから天皇も在位中は頭を剃りませんけれども、いいかげん退屈というか、飽きたら法皇になって頭を丸める、そして子供を天皇にする。天皇の時は神道で行って、止めたら何でもかまわないと変な妥協が成り立った。これが日本的だと思うんですね。

それで頼朝がなった時も、これはやっぱり京都の方では天地がひっくり返ったような感じがしたと思うんです。今迄は何といっても宮廷で土地を分けておったのが鎌倉がやるんですからね。その次又ショックはですね、今度承久の変の後で向うの方が勝手に次の天皇を決めるという方策を打ち出した時です。これもこの世のおしまいだと嘆いた訳です。じゃ北条の武家政治が悪かったといえば、後から考えるとそれは必ずしも悪くはないんですね。というのは間もなく元寇がやって来たでしょう元寇が、あの時北条幕府じゃなくて、当時の宮廷だったらこれは、日本は、北九州は占領されてますね。というのは当時の宮廷は恐れ多いことながら、何等武力の配慮ということが出来る人達がいませんので、ただただひたすら護摩をたいてお祈りするだけですよ。護摩たいてお祈りする位で蒙古軍が引き下がってくれるならですね、これは世の苦労がないといったもんですよ。でも蒙古辺に日本の神様のお祈りがそう効く訳ないですよね。向うは向うで神様をやってんだから。だからあの時やっぱり鎌倉武士がいなかったら駄目なんですね。

鎌倉武士は何かというえば、勿論神様を拝むと同時に仏教なんです。仏教もどの仏様もいらないという仏教、即ち禅宗なんですね。鎌倉幕府を作った人達は、宮中の仏教が大嫌いだった。真言宗だとかああいうのが、ようするに訳のわからないことを拝んでいると、武士にしてみれば何か割切れなかった。そうしたらたまたま元から逃げて来た、禅宗の偉い坊さんがぞくぞくと鎌倉に来た訳ですよ。そうしてその禅宗の坊さんに会ってみると、これは実に颯爽としている訳です。そして京都の方ではピカピカした寺院を見て極楽とはこんなもんだろうなと、いつも拝んでいる訳ですよ。誠にまあ何というかなよなよしい。

ところが鎌倉武士の武家なんかは、仏像はいらんと言っている訳ですね。あんなものは迷信だ、仏像なんかいらんと。空っぽの堂で結構、そこで胡座をかいて悟ればいいという訳です。途中に仏像があって、あれに頭を下げなくてもいいのかと言ったら、ああ、あれより仏像は私の方が偉いと、仏教の元から逃げて来たような言い訳です。それで鎌倉武士は感激した訳です。成程と、仏像よりも俺達は偉くなれるのかという訳ですね。それでひたすら坐禅なんぞを組んで、胆を錬った訳です。そして北条時宗なんて人はまだ青年でしたけど、非常に坐禅というか、禅宗に秀れて、それこそ支那から来た非常に偉い禅宗の老師も、時宗には舌をまいているんですね。この人は若いけれど誠に恐れ入ったものであるというようなことを書いています。

次号へつづく

宗像大社歌会 俳句作品集(三三)

藤沢市　井上　玄洋
風絡み春濤高く崩けり

福　間　広渡一寿軒
みちのくの「さんま自慢さ」気仙沼

福岡中央　力丸　玄風
頼り合ふ夫婦一ト日の梅の茶屋

津屋崎　西住喜三郎
城址とは名のみ祠落椿

日の里　花田いつえ
春浅し嬰児のひたと眠り継ぎ

田　熊　安部　ゆき
鳥雲に起重機うなる開拓地

田　熊　力丸　一郎
祝米寿(いとしゆほ)子らのはげまし春の宴

福　間　森　清
入試終えし女生徒の声弾むかな

滋　賀　岩瀬　辰夫
南天の実鳥が食べ居り早春の庭

津屋崎　井浦　良介
燕の巣にスズメの仮眠なる宿り

(続) 浜の寄物 35

軽石二、いしいただし

漂着する福徳岡の場の軽石について、加藤祐三先生は「福徳岡の場から琉球列島に漂着した灰色軽石」の論文の中で、次のような特徴を記されている。

一、角はすべて円磨されている。

軽石の漂着状況灰色状のもの

二、色は灰白色から暗灰色まである。

三、大きさは五ミリから最大二〇七センチまであり、大きな軽石は暗灰色ないし灰色のものが多いのに対し小さな軽石はすべて灰白色ないし、灰色である。

四、気孔の大きさは色によって差がある。暗灰色の軽石には、一ミリを超す気孔が多く、しばしば一センチ、ときには二センチに達する。これらの気孔は互に連結することが多い。これに対し灰白色の軽石では〇・五～一ミリの気孔が大部分を占める。また〇・二ミリ以下の気孔は両者にみとめられる。

専門的なことは省くことにする。現在、新たな漂着は見られない。多くは風などによって、砂浜海岸では、上の方(陸側)に吹き寄せられている。人工海岸では、消波ブロックや、護岸の空間のところに、溜るようにしてある。それらは、漂着当初のような、海藻類などの付着物はとれ、やや白ぼくなっているが、先述の加藤先生の特色を参考にすれば福徳岡の場産の軽石は、採集できよう。

八六年一月、マリアナ諸島北の福徳岡の場で、噴出した軽石は、四ケ月後の五月に、沖縄諸島の海浜に漂着、玄界沿岸には、それから六ケ月後の十月から、十一月頃に漂着がみられ、翌三月頃まで漂着が続いた。

これで想起されるのは、大正十三年十月三十一日、沖縄県西表海底火山(鳩間島付近)の爆発があり、この時に、大量の軽石が噴出し、黒潮本流、対馬暖流等に乗って各地に漂着、大正十四年十一月には、北海道根室色丹島に。日本海に入ったものは礼文島に漂着したのが、同年十月で、共に約一ケ年の日数が経過している。

関和男氏の「海洋気象台彙報十号」(一九二七)には、この時の軽石の状況を次のように述べている。

「容積の大なるもの、漂着や又其の量の多い事は勿論爆発地附近にある島嶼である。既も西表島では長さ七・八尺幅二・四尺にも達するものが漂着し、同島北西の海岸は汀から十間乃至十町も層をなして居た。沖縄島附近の沖では、直径三尺位のものが最大であって、同五・六寸のものが最も多かった。其の量は那覇附近では海浜一帯に漂着したものが幅五間位もあった」

という状況であった。石垣島測候所には、当時海を埋めつくした軽石の写真が蔵されている。

「以上の事実を綜合すると、八重山列島の各島嶼には随分巨大な軽石が漂着し、以北の南西諸島にも相当容積の大きなものが漂着したが、九州南東岸や四国沿岸には、余程小さなものより着いて居ない。

そして黒潮が真直ぐに打つ突かる紀伊半島南岸には、相当大きなものが漂着している。要するに黒潮の流れが遠ざかって居る海岸は軽石の容積が小さく、比較的陸岸に接近して流れる地方の沿岸には可成り遠方でも割合に大きなものが漂着している。更に沖合では又陸岸よりも以上の大塊が漂流して居る事が分り、牡鹿半島にも尚且つ径八寸以上にも及ぶものが漂着して居るのは、此の年の黒潮が犬吠岬を越えても尚東海岸に沿って北進して居た事が分る。そして根室や其の他、北海道南岸には急に其の形が小さく、量も亦非常に少ないのは金華山沖あたりから陸岸を離れて急に東に曲って行った事と想像が付く」

数年前、福岡市東区海の中道の砂丘が浸食を受け、その断面を見たら薄く軽石(2～3センチ)が層になっているのが見られた。西表島噴火のものと関係あるかどうか分からないが、海流によって運ばれたものが埋もれたものであろう。福徳岡の場のものも、あれだけの量であるから、砂丘の中に層として残る可能性がある。

まつりと生活 (二十三)

祭りの意義について

神道は、遠く縄文時代に起源を発し、主として弥生時代の稲作農業を母胎に形成された日本固有の宗教です。

仏教には釈迦、キリスト教にはイエス・キリスト、イスラム教にはマホメットという教祖がありますし、しかし神道には、教祖・教義教典を持っていません。あるがままに神の存在に触れ感応することを基本としている宗教です。仏教やキリスト教はいつも意識の表面に顕在することを必要としまたそのように説かれるのに対し、神道は日本人の意識下に深く沈潜しており、自覚されることが少ないのが特徴です。本来神道は他の宗教と違って、教義・教理を持ってこれを伝道するといったものではありません。

神道の祭祀は稲作農業を母胎としていますから、生命の根源である稲魂をはじめと生きとし生けるものへの感謝をこめて、これを神からの賜り物としていただくニイナメの行事を中心とし、予祝儀礼やその他の儀礼によっていずれも生命の根源に回帰するところに本旨があります。昔しながらのしきたりを繰り返して原初の時への回復を目指すものですから、本来伝統的であることをたてまえとします。そうした祭りが中心となって文化を形成することになるのです。少なくとも生命の根源つまり祖先を讃える祭祀であるかぎり、そこに祖先崇拝や山川草木の万物に対する感謝やいとおしむ心が芽生えてくるのは必然的です。

二十一世紀をひかえた今日、科学技術文明の発達によって、自然破壊や精神の荒廃が指摘されています。そうした中で、地方の祭りへの郷愁がとりざたされています。地方の祭りに多くの人びとが協同して参加している姿もテレビなどでしばしば見ることがあります。これに参加する人々の宗教宗派はさまざまですが、個人の宗教を越えて、神社の祭りは多くの人々に解放され、それによって一村、一郷、一国の社会的統合を果しています。

それは政治によって強制されたものではありません。個々の人のなかに無意識のうちに神道という宗教が息づいているからではないでしょうか。

また祭りは地方の盛大な行事だけではありません。日々の祭りが、宮中や神宮を始め全国大小の神社で繰り返し行われています。その形式と内容に多少の相違はあっても、本来の主旨は一つであり、共通しています。また太古以来今日まで、常に始源の状態を保持し、伝統を繰り返しつつ行われています。そこに日本民族として宗教意識を感じることができます。

ともすれば、我々は日常生活の中に埋没しまいそうになりますが、一年に一度こうした祭りを通して、日常生活の中から脱却して、生命力の活性化をはかる必要があるのではないでしょうか。

このように我々は祭りの繰り返しの中で、新しい生命を甦らせ、永遠の生命を維持し父祖伝来の日本民族の伝統を護っていかなければなりません。そこに祭りの意義があると言えます。

Y・S記

宗像むかし話 (34)

樽見峠

「たるみとうげ」と読む。古くは垂水峠・垂見峠等とも書いた。場所は宗像郡と遠賀郡との郡境を形造っている四ツ塚連山のうちの湯川山と孔大寺山との中間にあって、宗像郡の池田部落から遠賀郡の内浦へ越える道筋にあたっている。大昔はこの道が太宰府から京に登る官道であった。今は鐘崎を廻る海岸道路があり、更に国道三号線が郡の中央部を貫通しているので、樽見峠の道はさびれている。近時交通量の増加にともなって別に産業道路の開発が県議会で論議され、その結果この樽見峠が新県道として開発されることとなり、現在この道路が、宗像大社の前方近くを通っているのは、喜ばしい限りである。「垂水の所見は平家物語の「太宰府落ちの事」の段、「宗像社造営代々流記」「宗像第一宮御宝殿置札」等にある。

平家物語の成立年代については諸説があるが、大よそ鎌倉時代と見ていい。その中に壇浦で入水遊ばされた安徳天皇が、その少し以前に九州に下られる部分がある。そして更に九州を安住の所とされずに、太宰府から又長門国に行幸遊ばされるくだりが「太宰府落ちの事」である。

さしも頼もしかりつる天満天神の注連の傍を、心細くもたち別れ(中略)歩跳(かちはだし)で水城の戸を出でて、我れ先にと、箱崎の津へこそ落ち給へ。(中略)住吉・箱崎・香椎・宗像伏し拝み、「主上ただ旧都の還幸」とのみぞ祈られける。垂水山・鞆浜(内浦浜)などいう岐しき嶮難を凌がせ給ひて、渺々たる平沙へぞ赴かれける——

人の世のあわれをうたい上げた平家物語の中に、主上の御足蹟をとどめられた場所として現われているところが感慨深い。附近に安徳天皇御腰掛の五位の石、と伝えられるものが残っている。

「宗像社造営代々流記」は鎌倉時代の巻子本で、宗像大社の蔵本である。そのうちの宗像神社造営の初見とされる部分に「多海山」(たるみ山)のことが出てくる。即ち、光仁天皇宝亀七年の条に

人皇四十九代光仁天皇御宇宝亀七年丙辰廃所社被改

とあって、恐らく従前の社が荒廃していたものを改造したものであろう。この時に帝の夢想に白衣の美女が現われて

○多海山宗像田島我が屋敷造らして賜へ君栄えさせむ

の歌を告げられた、とある。この神歌が神殿改造の一つの機縁にもなったのであろうと伝えている。多海山(樽見山)は宗像の語に対する地縁的枕詞であろう。

この垂水の語は、大社の本殿にゆかりのあるものに出て来る。「宗像第一宮御宝置札」がそれである。この置札は、現社殿が新造された「天正六年戊寅」の年記があるもので、旧社殿が原因不明の出火によって御燃上したこと、一時に猛火と成り、風が荒れて余火の到る処

「垂水の峠に限(およ)ぶ」

としるしてある。当時の社会情勢や、大宮司が自ら手兵を率いて神領安堵の為東奔西走し、遂にもとの約二分ノ一の大きさに建造し奉ったと見えているものである。

宗像大社に神縁浅からぬ「樽見峠」が開発され、更に玄海レクリゾート構想が取りざたされる今日、脚光を浴びる日もそう遠いことではあるまい。